

「かえって福音を前進させ」

ピリピ1：12-18

堀田修一 21・9・26

- I 身に起こる事を支配しておられる神 「さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったことを知ってほしいのです」：12。

「私の身に起こったこと」→パウロの身に起こった事、私達の身に起こった事一つ一つ（人の目にマイナスに見える事も）を神は支配し、すべての事を働かせて益（私達の救い・主の姿への成長・神に立ち返る・神の御業の前進、完成の為の）として下さる（ローマ8：28）。一つ一つのこと、全能の神の御手において扱われ（私達が悔い改め神に立ち返る事も含めて）、一つ一つがつなぎ合わされて、神の御業の完成へと導かれて行く。

「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださる」：6。神は決して何もしておられないのではない。私達の歩みの只中に介入して、私達を御自身の御手の中で扱っておられる。私達にとって偶然という事はない。私達には隠されてわからない事（神のもの、神の領域にあるもの。申命記29：19）がたくさんある。それで私達は悩む。しかし、すべてに神のお考え、意味がある。私達の方は、分からない事がある事を認め、神に委ねる事である。神は主権者として、歴史のすべてを支配しておられる。私達も神のご計画と摂理に生かされている。※今回の聖会のメッセージの恵み。

- II 神のご支配の中でパウロに起こった事→「キリストのゆえに投獄されている」：13。

私達人間の目には福音の前進の後退に見える。しかし、それがかえって福音を前進させることになった。→

1. 「親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり」。パウロは、投獄された故に、そこでしか出会えない人々に大切なキリストを伝える事が出来た。神は、すべてをご計画し用いられる。私達の人生にも。人々との出会いは神の支配にある。※入院時の出会い、証し。「あなたがたは、わたしのゆえに、総督たちや王たちの前に連れて行かれます。それは、彼らと異邦人たちにあかしするためです」（マタイ10：18）。
 2. 「また兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことで、主において確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆に神のことばを語るようになりました」：14。
- ①福音を語ってくれたパウロが投獄されたことで、恐れ、臆病となり、神の言葉を語る事を止めるのではなく、むしろ投獄されても主を愛し主を喜ぶパウロの献身、聖なる情熱、主の為に喜んで苦しみを受けている姿（2：17）が、兄弟姉妹を励まし、信仰の確信と勇気を与え多くの

人々に大胆に神のことば、福音を語る聖なる情熱を与えた。私達にも、そのような事がある。
※証し。有澤師御夫妻の励まし。

- ②「主にあって」→パウロは投獄されても、主にあって、主とつながり主と交わり、恵みと平安を受け、主を喜んでいて。そしてピリピの兄弟姉妹も主にあって、主とつながり主と交わり、恵みと平安を受け、生ける主に確信を与えられ、人（迫害）を恐れることなく神を信頼し、ますます大胆に神のことばを語るようになった。共におられるインマヌエルの主は彼らを強め励まされた。そして今日の私達とも共におられ私達を強め励まされる。この2021年間、主は、主の教会を迫害の中でも前進させて来られた。※歴史の証し。OMFの創始者、ハドソンテラー達に迫害が起こった時、福音の前進は止まらなかった。
※偶像礼拝をしなかった方の証し。

3. 投獄という患難と共に、パウロには教会内の問題がふりかかって来っていた。教会内に問題の人々がいた。彼らは福音宣教に熱心ではあったが、問題の人物は、「善意」（：15）や「愛」（：16）や「純粋な動機からではなく」（：17）、「ねたみや争いをもって」（：15）、また「党派心からキリストを宣べ伝えており」、「鎖につながれている」パウロをさらに苦しめるつもりでいた。：17。このような人物が一人ではなかった。このような人々は、神の栄光を現わすどころか、人を傷つけてしまう。「党派心」とは、意見の相違から発する異なった考えの事ではなく、主に従おうとするよりも自分の勢力の拡大を図ろうとする分派精神であり、利己的な野望の事。主の栄光ではなく自分達の栄光、教会の建て上げ、徳を高める事よりも、自分達のグループ（主が中心ではなく、人が支配している分派）が大事というのが「党派心」。私達が、党派心から守られる秘訣は、ある人に支配されたり、ある人を支配することなく、教会の唯一のかしらであるキリストに自分の心を支配していただく事。主の祈りの「御国（原語の意：支配）が来ますように」とは、「まず私の心を神が支配して下さい」という祈り。人の悪口に振り回され分派に支配されないように祈る。※42年の牧会の中、試練の中で主に守られた証し。主こそ、すべてを見、事の真実を知っておられる。人につくのではなく、一人一人が主と主の御言葉につく、近づき続ける。その結果、人間的な一致ではなく、主を中心とした一致が生まれる。

Ⅲ パウロの喜び。「しかし、それが何だというのでしょうか。見せかけであれ、真実であれ、あらゆる仕方でキリストが宣べ伝えられているのですから、私はこのことを喜んでいますが。そうです、これからも喜ぶでしょう」：18。

1. 主に救われたパウロにとり、最も大切なもの、価値あるもの、喜びそのものは、キリストご自身、そのキリストが、一人でも多くの人々に宣べ伝えられることだった。投獄され、不自由であり、その上に党派心をもって彼を苦しめようとする人々があっても、彼の真の喜びは奪われなかった。
2. パウロ、そして私達の喜びはキリストご自身、キリストが宣べ伝えられる事。キリストは、いのちをかけて私達を救い、私達を愛されている。そして、まだ主を知らない人々を愛し、その人々の救いを望まれている。それゆえに、私達は主を喜び、主を宣べ伝えたい。「みこ

とばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても（神が時を与えておられる間に）しっかりやりなさい」Ⅱテモテ4：2。「すべての人を救いなさい」とは命じられていない。私達は、人を救う事は出来ない。人を救い成長させるのは神の分。「私が植えて（福音の種を蒔き）、アポロが水を注ぎました（御言葉を教えました）。しかし、成長させたのは神です」Ⅰコリント3：6。私達の方は、祈りつつ愛を持って主を伝える事。結果は主に委ねましょう。使徒の働きを読んでも、弟子達やパウロが主を伝えても、すべての人が主を信じたという箇所はない。伝道の結果、信仰に入る人と主を拒む人、迫害をする人が起きたと正直に記されている。まず自分が主と深く交わり、自分にできる事から。とりなしの祈りの種、愛の種、集会の案内、福音版を渡すという種、求める人に福音を語る、御言葉の種を蒔き続ける。神は何一つ無駄にされない。すぐに芽が出なくても失望しない。神の時に芽が出る。主を伝えても信じない人が、亡くなるまでの時間、主がどう働かれるか人には分からない。主に委ねましょう。

3. 主を伝えた時ではなく、後に、救われ、主に仕えている人々の証し。「あなたのパンを水の上に投げよ。ずっと後になって、あなたはそれを見いだす」伝道者の書11：1。「時が来ると実がなり」詩篇1：3。「いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは、自分たちの労苦が主にあって無駄ではないことを知っているのですから」Ⅰコリント15：58